

「日本語学会 2013年度秋季大会」

2013年10月26～27日
静岡下学

10月26日(土) [静岡大学静岡キャンパス]
○開会式 13時30分～13時45分(大会会館ホール)

○シンポジウム 14時00分～17時00分

★ 日本語史はいかに叙述されるべきか(大会会館ホール)
(企画担当:大木 一夫・多門 靖容)

パネリスト

音韻史—拗音をめぐる二つの物語	東京大学	肥爪 周二	3
“ストーリー”としての日本語文法史	九州大学	青木 博史	11
文字・表記史叙述の方法	大阪大学	矢田 勉	19
指定討論者	明治大学	小野 正弘	

○ワークショップ 14時00分～17時00分

第1会場(共通教育B棟 3階 301室)

講義の談話の単位と展開

石黒 圭・佐久間まゆみ・渡辺 文生・宮田 公治・宮澤 太聡 27

第2会場(共通教育B棟 4階 401室)

飯島方言から考える方言類型論と方言接触論

松丸 真大・黒木 邦彦・坂井 美日・山本 友美・平塚 雄亮 45

10月27日(日) [静岡大学静岡キャンパス]

○研究発表会 9時30分～16時20分

(口頭発表・午前の部) 9時30分～11時00分

A会場(共通教育B棟 3階 301室) [司会] 多門 靖容

日本語・韓国語指示詞の時制対照研究 高 雅紀(9:30) 63

★ 小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現—発話動詞・思考動詞を修飾する場合— 張 子如(10:20) 69

B会場(共通教育B棟 4階 401室) [司会] 大木 一夫

④ テキストにおける空間的置記動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能—「そびえる」を中心に— 吳 揚(9:30) 77

四モーラ量語と基層方言—東京都東村山市, 鹿児島県飯島を例に— 高山林太郎(10:20) 85

C会場(共通教育B棟 5階 501室) [司会] 矢田 勉

近世・近代の西洋人による敬語研究の諸相—「でござる」の捉え方を事例として— 青木志穂子(9:30) 93

江戸時代末期人情本の活字化資料にみられる諸問題—「あるのです」は「あるです」— 浅川 哲也(10:20) 101

(口頭発表・午後の部①) 13時00分～14時30分

A会場(共通教育B棟 3階 301室) [司会] 秋元 美晴

助動詞「-店」の成立に関する言語的・社会的要因 田中 佑(13:00) 109

「5-0と田勝した」タイプの「と」の用法について 須藤 佳子(13:50) 117

B会場(共通教育B棟 4階 401室) [司会] 小西いずみ

- 方言におけるノダ相当形式の文法化—大阪方言と加賀地方若年層方言を対照して— 野間 純平(13:00) 126
 - 淡路島方言の述語形式「ヨットラ」について 中澤 光平(13:50) 131
- C会場(共通教育B棟 5階 501室) [司会] 福嶋 健伸
- 中古和文における体言下接の終助詞カナ・ヤ 富岡 宏太(13:00) 139
 - モノナリ文の特性とモノソ文の「推量用法」 勝又 隆(13:50) 147

(口頭発表・午後の部②) 14時50分～16時20分

A会場(共通教育B棟 3階 301室) [司会] 三宅 知宏

- 近代日本語書き言葉における主語標示助詞ガ・ハ・ノの使用頻度について 藤田 浩(14:50) 155
- トートロジーとコピュラ文との関わりについて—意味構造から見る— 張 秀娟・陳 防澤(15:40) 163

B会場(共通教育B棟 4階 401室) [司会] 小野 正樹

- 待遇表現運用の実態にみるわきまえの動態—滋賀県長浜市方言の自然談話データから— 酒井 雅史(14:50) 171
- 小学生の敬語行動 荻野 綱男(15:40) 179

C会場(共通教育B棟 5階 501室) [司会] 高山 倫明

- 倭玉篇から落葉集小玉篇への継承と工夫に就いて 鈴木 功真(14:50) 185
- シモの古辞書に見える方言の反映をめぐって 米谷 陸史(15:40) 193

(ブース発表) 11時10分～12時10分

D会場(共通教育L棟 2階 202室)

- 伝達・確認の終助詞の意味記述にととの「発話」—福岡市博多方言の終助詞「バイ」について— 坪内佐智世 201
- 日本語における漢字・漢文を媒介とした言語借用モデルの構築 ジスク・マシュー 207
- 内田魯庵訳・翻訳小説『罪と罰』における従属節から見た近代口語文体 小西 光 213

E会場(共通教育L棟 2階 203室)

- 漢語副詞の受容と展開—(漢語の和化)と否定との呼応— 新野 直哉・橋本 行洋・梅林 博人・島田 泰子・嶋海 伸一 219
- 古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビューアの開発 高田 智和・小助川貞次・堤 智明・斎藤 達哉・小木曾智信・小野 博 225

F会場(共通教育L棟 3階 304室)

- △ 原本画像参照機能付き『明六雑誌コーパス』の開発 近藤明日子・高田 智和・小木曾智信・堤 智明 229

予稿集(要旨集) バックナンバーについて 235

日本語学会 2014年度春季大会予告および研究発表者募集 237

日本語学会 2013年度秋季大会
2013年10月26・27日 於: 静岡大学
大会企画運営委員会
石井正彦(委員長)・秋元美晴・大木一夫・小野正樹・小西いずみ・
高山倫明・多門靖容・田和真紀子・福嶋健伸・三宅知宏・矢田勉
開催校委員
久島茂(委員長)

日本語史はいかに叙述されるべきか

趣旨説明

おおき かずお
大木 一夫 (東北大学)

1. 日本語史叙述という問題

日本語史研究は、きわめて実証的な側面が強く、時間的にさかのぼった日本語の、いわば歴史的事実・歴史上の現象を丁寧に記述していくというのが、日本語史研究のひとつの特色といってもよいように思われる。そのこと自体、きわめて重要な側面であることは間違いないところである。ただ、ともすれば、日本語の歴史を、歴史として叙述することに、あまり自覚的ではなかったという面があったともいえる。日本語史研究が歴史的な研究である以上、そこには、歴史としての何らかの叙述の方法があると思われるが、そのことを十分検討してこなかったということがあるのではないだろうか。

2. 日本語史叙述について、これまでどのように考えられてきたのか

もちろん、これまで日本語史叙述について、全く考えられてこなかったわけではない。たとえば、山口佳紀 (1973) は次のように述べる (引用中の／は改行。以下同じ)。

世に、「言語の実態を明らかにする」と称する研究の中には、「実態」や「事実」が、一定の理論や立場を前提にすることなく把握され得るものと考えているのではないかと疑われるものが、往々にして存在するように思われる。しかし、何らかの立場を前提にしないで、「実態」や「事実」が抽出できるはずはない。(中略)／かくして、国語史研究は、深刻な理論的反省を経験することが少なく、ひたすら「実態」の研究を積み上げて来た感がなくもない。方法的な深化や問題意識の更新といった点で見るとべきものが少ないというようなことは、恐らく、右のような学問的態度に基づく所が多いのではないかと考えられる。

このような点は、近時においても「その批評が現在も有効である」(大槻信 2012) とされるところからすると、やはり、全く過去のことではないといってもよい。また、小松英雄 (1999) が「文献資料に見いだされた事実を指摘しただけであり、その事実を日本語史の流れのなかに位置づけようとしていないことに気づいて愕然とした」と述べるのは、同様の感慨であろう。

このような日本語史批判は、また同時に方向性の示唆をもつものでもあって、山口は「何らかの立場」「理論的反省」を求めることからわかるように、日本語史理論の必要性を説く。小松も方法的な反省を行う必要を述べ、機能主義的な言語変化の把握にもとづく叙述をすすめる。

また、阪倉篤義は「史的概念としての「変遷」という視点から、次のように述べ、日本語史叙述のキーワードとして「変遷」という概念を示す (松村明他 1975)。

こういう「変化」に対して、「変遷」という語は、まず、いまま少し体系的な推移について言われ

るべきであろう。(中略)／さらに必要なことは、こうした推移が、どのような方向性を持ち、それが日本語の推移の方向に対してどのような意味をもつかを明らかにすることである。(中略)そういう事態の発生する、より根本の理由は日本語における表現のスタイルが、たとえば総合的から分析的な方向へむかうということにあった、と解するような立場である。／「変化」が、主として具体的な形態の面について言われるのに対して、「変遷」は、むしろ右のような、体系における価値の側面について言われることになる。

しかし、小松英雄 (1999) が「過去の日本語に関する情報を編年的に羅列したものが日本語史ではありえないと否定的に言い切ることは容易であっても、これこそ日本語史研究の実践であると、具体例を提示して明言することは至難である」とするように、方法論の必要性はわかるにしても、では具体的にはどうするのか、ということを示していくところに、高い壁があったわけである。

3. このシンポジウムでは...

では、どうするのか。むしろ現在、その答えが簡単にまとまる状況になっているとはいえないだろうし、もとより、歴史叙述の方法というものは、歴史認識のあり方であるから、研究者によって異なるものであるともいえ、ひとつにかざられるものではないだろう。ただ、このような議論は広くおこなわれるのがよい、ということ間違いないところかと思う。

また、最近は、「事実の羅列」ではない日本語史についての言及にふれる機会が増えつつあるような感を受ける。たとえば、「全体を一つの物語にまとめたく思う」(野村剛史 2002) という発言や「歴史的变化をダイナミックに捉える」(青木博史 2010)、「合理的なストーリーを描く」(肥爪周二 2007)、「ロープ状の言語史記述モデル」(矢田勉 2006) などの言及は、日本語史叙述がいかにあるべきかという方向性を含んだものといつてよい。

そこで、このシンポジウムでは、パネリスト御自身の日本語史叙述の方法を、具体的に提示していただき、日本語史の叙述の方法について広く議論したいと考える。そのことで、日本語史の叙述はいかなるものなのか、いかなるものであるべきなのかを考えていく、その一端としたい。

パネリスト：肥爪周二 (東京大学)、青木博史 (九州大学)、矢田勉 (大阪大学) (登題順)
指定討論者：小野正弘 (明治大学)

文献

- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
大槻信 (2012) 「研究資料 (史的研究)」『日本語の研究』8-3
小野正弘 (2011) 「国語史研究の可能性」『文学・語学』200
小松英雄 (1999) 『日本語はなぜ変化するか 母語としての日本語の歴史』笠間書院 (新装版 2013)
野村剛史 (2002) 「連体形による係り結びの展開」『シリーズ言語科学 5 日本語学と言語教育』東京大学出版会
肥爪周二 (2007) 「閉鎖と鼻音」『日本語学論集』3
松村明他 (1975) 『シンポジウム日本語① 日本語の歴史』学生社
矢田勉 (2006) 「国語学 (国語史)」『文学・語学』184
山口佳紀 (1973) 「国語史研究の方法に関する覚え書」『文学・語学』66 (山口佳紀『古代日本語史論究』風間書房 2011 所収)

テキストにおける空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能

——「そびえる」を中心に——

呉 揚 (岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程)

1. はじめに

日本語の空間的配置動詞「そびえる」は、金田一(1950)の動詞分類では、終止位置にくるときに必ずシテイル形式をとる典型的な第四種動詞とされている。これに対して、影山(2012)では、「そびえる」にはスル形式もあるとし、以下のようなスル形式とシテイル形式の性質の違いに注目している。

- ① 点的時間副詞をとることができるか。
 - ・上海には今のところ超高層ビルが(*そびえる)そびえている。
- ② 知覚したり撮影したりしたこととして表現できるか。
 - ・向こうの方に超高層ビルが(*そびえる)そびえているのを見た/写真に撮った。
- ③ 時制の混用が可能か。
 - ・この赤チリに入ったのだな、という印象をオレに与えた。前方は険しい山がそびえる。右側を谷にして、登ってきた時よりも急な坂を下った。(南北アメリカ徒歩横断日記)
- ④ 場所格と主格の2項を常に必要とするか。
 - ・アルプスの山々が(*そびえる)そびえている。

これらの相違点から、影山は、「そびえる」のシテイル形式は事象叙述であり、スル形式は属性叙述(恒常性=場所格の属性)であると結論づけている。

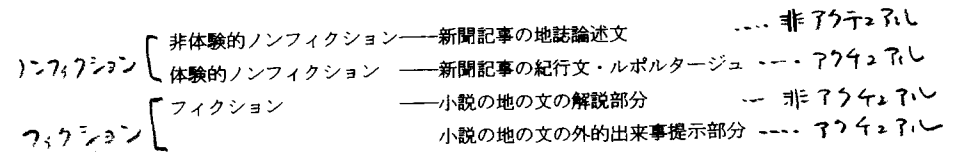
金田一の単語レベルの分析を文レベルの分析(叙述類型)に発展させた影山(2012)の意義は大きいのだが、例えば、小説を対象に動詞「そびえる」の調査を行ってみると、会話文でも地の文でも、スル形式はほとんど見当たらず、そこでは金田一の主張が成り立っているようである。一方で、新聞記事を調査すると、影山の指摘通りに、恒常性を表すスル形式がたくさん出てくる。しかし、恒常性を表すシテイル形式もめずらしくないものである。

本発表では、動詞「そびえる」のアスペクト形式の選択がテキストタイプと相関していることを明らかにし、そのテキスト的な機能を明らかにすることを目的とする。なお、テキストレベルの考察においては、影山の指摘している「時制の混用」の問題も重要なので、アスペクト形式だけでなく、テンス形式にも注目する。

2. 調査の方法と結果の概観

文を超えたテキストのレベルでアスペクト・テンス形式の機能の分析は、すでに工藤(1995)で試みられている。そこで区別されているテキストのタイプは、対話(はなしあい)・フィクション・ノンフィクションである。「そびえる」は対話にはほとんど現れないことから、ここでは、フィクションとノンフィクションをまず大きく区別することにする。フィクションのテキストは小説の地の文で代表させ、ノンフィクションのテキストは新聞記事で代表させる。また、工藤(1995)に従って、小説の地の文を構成する部分として、外的出来事提示部分と解説部分を区別する。この区別は、アクチュアル性の有無という点で重要である。ノンフィクションのテキストに関しても、これを体験的なものと非体験的なものに分け、前者を紀行文・ルポルタージュで、後者を論述文で代表させる。新聞記事において「そびえる」が出現する論述文とは、資料・記録による地方の自然や文化に関する非アクチュ

アルな事実の論述である。



以上のようにテキストのタイプを分類したうえで、「そびえる」のアスペクト形式の分布を概観すると、次のようになる(×は用例がほとんどないことを示し、○、△は用例の多少を示す)。

	ノンフィクション		フィクション		
	地誌論述文	紀行文・ルポ	解説部分	外的出来事	
スル - 完成相	○	△	×	×	「そびえる」
シテイル - 継続相	△	○	○	○	「そびえている」

① (非体験的) (体験的)

- ① このように、ノンフィクションとフィクションでは、完成相の現れ方に明らかな違いがある。また、
- ② ノンフィクションにおいては、体験的・非体験的の別が完成相と継続相のいずれが中心になるかという点に関係している。③ 小説の解説部分と外的出来事提示部分は、アスペクト形式の分布に関しては違いないが、その機能は異なる(後述)。以下では、テキストのタイプごとにアスペクト・テンス形式の意味とテキスト的な機能を実例にもとづいて観察していくことにする。なお、ここでは終止形のみを対象とし、連体形は扱わない。統語論的な機能の違いによって、アスペクト・テンス形式の使われ方に違いが出るからである。たとえば、終止形にはほとんどないシタ形式が連体形には現れる。

3. 非体験的ノンフィクションのテキスト—地誌論述文—における「そびえる」

まず、非体験的ノンフィクションのテキストである地誌論述文から見ていく。地誌論述文では、「そびえる」の多くはスル形式で現れ、シテイル形式はむしろ少数である。また、ごくわずかにシテイル形式も見られる。シタ形式はない。

3.1 完成相「そびえる」

地誌論述文における完成相非過去形式(スル形式)の「そびえる」を述語にする文には、次の3つのタイプがあり、区別しなければならない。

1つは、特定の場所を主題として、その場所の特徴として自然物や建造物がそびえることを述べるタイプである(例文1)。2つめは、「そびえる」主体が主題となるタイプである(例文2)。語順も違ってくる。

- 1) 内部には、是山の生涯を紹介したパネルや写真、親交のあった歌人と謝野鉄幹・晶子夫妻の短冊や色紙、熊本出身の画家聖山南風が描いた俳誌の表紙など約60点が展示されている。是山は在職中から俳誌を主宰し、短歌を詠み、郷土史を編集する多才ぶりを発揮した。記念館の裏には「淡成居」と名付けた旧居があり、庭にはイチョウの大木がそびえる。その一角に50年に建立した筆塚があり、是山の句が刻まれている。(朝日新聞 2008/9/21)
- 2) 早池峰山(標高一、九一七メートル)は、岩手県北上山地のほぼ中央部にそびえる。古くから

霊山としてあがめられる山岳信仰の山だ。農耕の神、漁業の神が住むと信じられた。中世以降、早池峰山には多くの修験者たちが修行の道場を開いた。(朝日新聞 2000/11/20)

1)と2)は、場所と主体のいずれを話題として述べていくかというテキスト構成上の機能の違いであらう。ところが、3)のような、場所も主体も主題化されないスル形式の例が見られる。これは冒頭の文全体が主題となつて、第2文につながっていくという構成になっていると思われる。

3) 鳥取市の鳥取砂丘の一角に直径36メートル、高さ15メートルの巨大ドームがそびえる。鳥取大の「乾燥地研究センター」の実験用ドーム。様々な乾燥地の気候をシミュレーションできる自慢の施設だ。内部には、乾燥地特有の熱風を再現する装置や人工的に雨を降らせる装置などがそろつた。(朝日新聞 2008/10/27)

地誌論述文における「そびえる」のスル形式は、主体の恒常的な空間的配置を表すといつてよい。したがって、時間的・空間的な状況を表す条件節(「〜と」)がつきそつていても、空間的な条件しか表さない。つまり、この条件節は実質的には場所を表している。

4) 大山祇神社は島西部にあり、貴重な奉納品が多い。宝物館には禽獣葡萄鏡、鎧、兜、大太刀などの国宝8点など多数の文化財が収蔵、展示されている。今年4月には、688年ぶりに総門が再建された。総とノキ造りの壮麗な門をくぐると、国の天然記念物に指定されているクスノキの巨木群がそびえる。(朝日新聞 2010/9/9)

以上のような地誌論述文における「そびえる」のスル形式は、存在動詞「ある」が恒常的な存在を表すのとよく似ている。これらの例の二格補語は存在場所を表している。「そびえる」は、「空にそびえる」のような使い方においては典型的な空間的配置を表すが、この用法では二次元的に使用されており、いわば存在動詞化しているといえるだろう。

3.2 継続相「そびえている」「そびえていた」

(1) 非過去形

地誌論述文では、スル形式が多く見られるが、シテイル形式の「そびえている」も見られ、その使われ方に大きな違いはないようである。前節の例の「そびえる」を「そびえている」に変えてもいいし、以下の例の「そびえている」を「そびえる」に変えてもいいだろう。

5) 昭和通りと渡辺通りが交差する一等地に、10階建てのビルがそびえている。天神で半世紀以上も前から貸しビル業を営む老舗が所有する紙与渡辺ビル。2年前に完成し、大容量の通信回線や個別空調など充実した設備を誇る。ところが七つのフロアを占めるNTTドコモ九州グループはいま、退去準備を進めている。(朝日新聞 2002/8/10)

6) 清水谷家の椋 京都御苑西側の蛤御門から苑内に入り、御所の方に歩くと、樹齢約300年の立派なムクノキがそびえている。この辺りに公家の清水谷家屋敷があったのが、名前の由来とされる。(朝日新聞 2009/6/12)

もっとも、次のような例では、「そびえている」がより自然であると思われる。「海底から」「海中から」という補語をとまなうことによつて、垂直方向の空間的配置を表すことと関係がありそうである。ただし、このような例は比較的少ない。

7) 海保によると、スルガ海山はグアム島の西北西約200キロにあり、水深約1600メートルの海底から頂上は水深40メートルまでそびえている。米国の排他的経済水域(EEZ)にあるが、海底地名は最初に調査した国・機関が命名するのが一般的という。(朝日新聞 2006/6/21)

8) この沼島はかつて、「日本書紀」「万葉集」「撰津国風土記」に出てくる「野島」だという説もあったが、現在では否定されている。しかし、沼島は古くから海人の住む地であった。淡路本島や四国、紀州に近く、豊かな漁場をもち、水も豊富で、西海岸には船の停泊に都合のよい入り江がある。島の東には、海人たちの信仰心を満たしたであろう巨石が海中からそびえている。そして、製塩遺跡や古墳も残っている。(朝日新聞 2011/3/3)

以上のように、地誌論述文では、「そびえる」は、スル形式でもシテイル形式でも使用され、多くの場合、場所の二格をとまなう、二次元的な存在動詞的な用法で用いられている。このテキストでは、スル形式とシテイル形式は、時間的限定性の点で対立するわけではなく、いずれも恒常性を表す。

(2) 過去形

地誌論述文における「そびえる」が恒常性を表すとするれば、過去形はないはずであるが、実際は、わずかながら「そびえていた」の例が見られ、「主体の非現存」を表す。こうした現象は、やはりテキストタイプと関係がある。ノンフィクションである地誌論述文では、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけがあり、過去形はダイクティックな過去の意味を実現するのである。

9) 東京湾観音が立つ富津市の丘陵の一面に、かつて浅間山という小高い山がそびえていた。この山は71年から、対岸にある川崎の日本鋼管扇島製鉄所の埋め立て用に削られ始め、いまは標高200メートルあった山の跡形すらみられない。(朝日新聞 1992/12/15)

10) 聖徳太子は1万円札にも描かれたカネの象徴。四半世紀を経て残る肖像画の視線は、一獲千金の欲につけ込む商法が尽きない現代社会を見通していたかのようだ。隣接地にはピラミッド型の「国際平和祈念会館」もそびえていた。「オウム真理教が取得計画中」とのうわさで、阿蘇町が敷地と建物を買収。役場庁舎への転用も検討したが、補修・改装費が膨大で解体された。(朝日新聞 2004/4/20)

11) 県の最北端で、利根川と江戸川が分流している。江戸時代には水上交通の要衝として関所があり、1871(明治4)年に藩が廃止され、解体されるまで関宿城がそびえていた。その本丸跡から約500メートル北に、かつての天守閣を再現した「県立関宿城博物館」が1995年に完成した。(朝日新聞 2009/12/3)

4. 体験的ノンフィクションのテキスト—紀行文・ルポルタージュにおける「そびえる」
次に、体験的ノンフィクションのテキストとして、紀行文・ルポルタージュを取り上げる。このテキストでも、「そびえる」には、3つのアスペクト・テンス形式の使用が見られるが、完成相よりも継続相が多くなり、特に継続相過去形が頻りに用いられるようになる。同じノンフィクションのテク

3 非体験的ノンフィクション

そびえる = そびえている ... 恒常的空間配置

(そびえていた) ... 主体の非現存

(文脈的
配置)

下でも、体験的と非体験的とは、「そびえる」のAspect・テンス形式の用いられ方は大きく異なるのである。以下、用例の多かった継続相の方から述べる。

4.1 継続相「そびえている」「そびえていた」

1) 過去形

ノンフィクションである紀行文・ルポルタージュは、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけがあり、過去形はダイクティックな過去の意味を実現するのだが、このタイプのテキストに現れる「そびえる」の継続相過去形は、地誌論述文におけるような客観的な過去の意味を表さない。

12) 車で県東部の海岸を走った。道路から見る春の海は、青く澄んでいて、心まで広々としてくるようだった。大きな道路から海辺に向かう小道に折れ、浜辺に近付いていく。すると、視界がだんだん狭まってくることに気付いた。浜辺に立つと、見上げるようなテトラポッドの山が、威圧感を持ってそびえていた。水平線がその無愛想な灰色の肌に分断されている。(朝日新聞 1997/4/25)

13) 植栽が整えられた日鉱記念館。その一角に旧日立鉱山第一堅坑の櫓がそびえていた。淡いブルーのペンキが塗られ、最上部に取り付けられた滑車がいまにも回り出しそうなほど真新しく見えた。櫓の高さは約20メートル。鉱石を地上まで運び出したエレベーターや、黒光りした巨大なモーターを備えた巻き上げ機などが保存されていた。近くでみると、さびが浮き、風化している部分もあり、歴史を感じさせた。(朝日新聞 2012/10/27)

もしこれらが客観的な過去を表しているなら、9)~11)と同様に、主体の非現存を表すはずであるが、これらの主体は発話行為時にも存在しているので、これらはそのような意味を表さない。これらの過去形は、「富士山は美しかった」と同じような「体験的確認」というムード的な用法と理解すべきであろう。なお、文脈には、書き手の主体あるいは周りの事物に対する評価なども同時に現れることが多い。「浜辺に立つと」のような条件節もしばしば現れ、時間的・空間的な状況を表す。

体験的確認を表すという点では、次の例も同じであるが、二格補語が存在の場所ではなく関係の対象を表している。体験的テキストでは、このような垂直方向の空間的配置を表すことが多くなってくる。

14) 鳥海山との出あい二十四年前。樹木を描きながら全国を回っていたころだった。軽い気持ちで訪れた鳥海山。残雪の山が曇りつない青い空にそびえていた。圧倒された。そこに生きる樹木もすごかった。雪につぶされても春になれば、また空に向かって伸びる。それまで描いていた樹木には「やさしい女性像」を感じていたが、鳥海山のブナは「強さと美しさのある女性」だった。(朝日新聞 2000/10/5)

2) 非過去形

体験的ノンフィクションのテキストにおいて、継続相過去形が体験的確認というムード的な用法であるのに対して、非過去形は「臨場感」という文体的効果のために使用される。体験的確認と臨場感というニュアンスの違いはあるが、このテキストにおいては、継続相の過去形と非過去形は置き換え可能である。17)は、垂直方向の空間的配置を表している例である。

4 体験的ノンフィクション

(そびえる) → そびえている ... 臨場感

|||
そびえていた ... 体験的確認

15) そんな彼に、家に遊びにおいでと誘われた。次の日曜、お菓子を持って訪問することにした。立派な日本家屋で、庭には松の木がそびえている。おじいちゃんは「家族にはお客が来ると伝えてあるから」と言っていた。少し緊張気味にチャイムを鳴らすと、娘さんと思われる女性が出向いてくれた。「おじいさまはご在宅ですか」と僕が尋ねると、女性はちよつと警戒心を強めた視線を投げかける。僕が来ることを言い忘れたのかなと思った。(朝日新聞 2009/8/23)

16) 最初に訪ねたのは藤井・田龍王社だった。出会い点から50メートルほど山頂側へ歩くと、道路わきの山すそに間口約80センチの春日造り神殿が立っていた。「藤井田龍王社」「田町龍王社」と書いた2種類の標示があり、背後には神木らしい杉の巨樹がそびえている。神殿前には、直径5メートルほどの水量豊かな澄み切った池があり、水を治める竜王にふさわしい祭祀場を形成していた。(朝日新聞 2006/11/7)

17) 流域の遊歩道も途切れるのでJR仙石線沿いに西進、多賀城駅へ向かう。駅前からは道端の標識に導かれて砂押川の鎮守橋を南に渡り、10分も歩くと宝国寺に着く。参道左手に清原元輔の「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波こさじとは」の歌碑が立っている。歌枕の「末の松山」は本堂の裏手にあり、小高い丘に樹齢470年以上という黒松の巨木が、流れる雲を背に悠然とそびえている。(朝日新聞 2007/1/6)

4.2 完成相「そびえる」

多くはないが、体験的ノンフィクションには、完成相非過去形「そびえる」も現れ、継続相非過去形「そびえている」と同じように、臨場感という文体的効果を生じていると考えられる。

18) 東一番丁通をさらに進み、ふと見上げると巨大な赤ちょうちんが見える。右手には鳥居に見立てた赤い柱がそびえる。そこを右折。しばらく歩を進めると、すぐ左手に今度は本物の赤い鳥居が見える。小道を進むと、高いビルに囲まれる中、ひっそりと野中神社があった。(朝日新聞 2007/9/29)

19) ゆっくりこぎながら、木々が茂って周りを包み込むような両岸の山々を眺め、響き渡るセミの鳴き声に耳を澄ませた。10分ほどのんびりしていると、勢いよく流れる水音が聞こえてきた。白いしぶきが上がり、ごつごつとした岩が目の前にそびえる。パドルを水に突き刺しながら、ラフトを岩間の流れに突入させていく。急流に入った瞬間、ラフトと一緒に体も前のめりになり、速度が一気に増した。岩が体すれすれを通りすぎる。(朝日新聞 2007/9/8)

臨場感を出すには「そびえている」でよいのに、これらの例のように、「そびえる」が使われるというのは、「継起性」というタクシスの意味を表すためではないかと思われる。つまり、筆者の視野に突如大きな物体が出現したということを示す「そびえる」という現象に擬して表現しているということである。

5. フィクションのテキスト—小説の地の文の解説部分—における「そびえる」

以下、フィクションのテキストに目を移す。取り上げるのは、小説の地の文である。まず、非アクチュアルな背景の説明を行う部分である解説部分から考察する。小説の地の文の解説部分には、地誌論述文の場合とは違って、ほぼ継続相のみが現れる。過去形の場合も非過去形の場合もある。

20) 「これ、いずれへ参られる」一応うやまった言葉を使ったのは、ひどい身なりをしているものの、相手が両刀を腰に帯びた武士だからだが、口調は厳しかった。海坂藩の城は、正面口にあたる城壁の下を水深の深い川が横切り、そのまま濠の役目をしている。築城のときに、前からあった川の底を浚い、石塁を積んで、そのように利用したのである。幅十間ほどの川に橋が架けられ、橋の手前に木戸、向う岸にいかめしい大手門がそびえている。この正面木戸を加えて、城の周囲には、十二の木戸が配られている。(竹光始末)

21) 巨大なドアへ手を伸ばし、力をこめて押した。視界が大きく開けた。ソフィーは戸口に立ったまま、長方形の室内をしばし見渡した。ここも柔らかな赤い光に包まれている。(国家の間)はこの美術館の数少ない袋小路のひとつであり、グランド・ギャラリーの中ほどに孤立して通り抜けができない。唯一の出入口となるこのドアの向かいの壁には、高さ十五フィートのポッティチェルリの絵がそびえていた。その手前には、寄せ木張りの床の中央を占める形で、大きい八角形のソファが置かれている。ルーヴル最大の財産を鑑賞しながら脚を休められるので、多くの入場者にとってありがたい憩いの場だ。とはいえ、入室する前から、ソフィーは必要なものが欠けていることに気づいていた。(ダ・ヴィンチ・コード)

これらの解説部分に現れる継続相形式は、恒常的な空間的配置を表している。ここでは、非過去形と過去形のいずれを使ってもよい。実際、21)では、空間的配置を表す後続文が非過去形になっている。恒常的であっても過去形が使えるのは、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけのないフィクションのテキストであるからである。また、非過去形であっても臨場感がないのは、非アクチュアルな背景の説明であるからである。

6. フィクションのテキスト—小説の地の文の外的出来事提示部分—における「そびえる」

小説の地の文の外的出来事提示部分でも、ほぼ継続相形式のみが現れる。これらは、そのときの作中人物の視野にある情景を描いている。「巨大な」「黒い」「黒ずんだ」「屏風のように」のような規定語、修飾語によって、作中人物の主体の特徴に対する評価も同時に表されている。前後に示された出来事との間に「同時性」というタクシスの意味も表されている。

22) ぼくらは下水道の穴から出た。もう夜になっていた。ぼくらの上には巨大な黒い壁がそびえていた。ぼくははじめ、星の出ている夜空だと思った。それからなじみのおい、さびた鉄と熱いエンジンオイルのにおいが鼻をついた。「おいで！」頭のなかで、久しく聞いていなかった声が出た。「おいで、モロッホへ！」洞窟トロールはハナをすすりながらぼくを見た。(キャプテン・ブルーベアの13と1/2の人生)

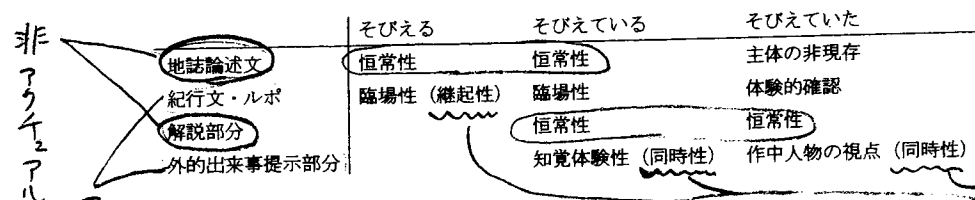
23) 彼女は目をあいてまわりを見わたした。二人は丘の頂上にいた。しばらく前に日は沈んだが、なごやかな夕あかりの中にあたり一帯がひと目で見はらせた。西のほうには黒ずんだ教会の尖塔が、きんせん花色の空にそびえていた。目の下は小さな谷となっており、向こうの長いゆるやかな傾斜には、こぢんまりした農場があちこちに見えた。(赤毛のアン)

24) 馬車の響きが止ると、四辺がしんとする。どこかで遠く水の流れる音がする。雪の中に立って四辺を見ると、私達はいつか広い野に出ていた。迫っていた山が離れて、黒い巨大な影が雪の中に屏風のように聳えている。その裾野のところどころから火が見える。雪の中に火がぼつと赤く隈どっている。私は深く胸の奥で呼吸をした。(遠野へ)

テンス面に注目すると、発話行為の場へのアクチュアルな関係づけのない外的出来事提示部分(かたり)では、テンス形式はダイクティックな機能をもたず、叙事詩的時間としての過去形が主導形式となる(工藤1995)。24)のような非過去形は、作中人物の「知覚体験性」を明示するために使用されたものであろう。

7. まとめ

本発表の考察結果をまとめると、以下のようになる。



テキストタイプの違いを超えて、3つの形式それぞれの表す意味を1つに抽象することは不可能であるが、地誌論述文と小説の地の文の解説部分を「非アクチュアルなテキスト」、紀行文・ルポルタージュと小説の地の文の外的出来事提示部分を「アクチュアルなテキスト」としてまとめるなら、前者では恒常性(客観的な用法)が中心となり、後者では、ムード性、文体的効果、視点が前面化した主観的な用法が中心となるといえる。

影山(2012)は、「茂る」「林立/屹立する」「連ねる」「横たわる」などの動詞にも、スル形式の使用が見られることを指摘している。「そびえる」以外の空間的配置動詞については、発表者も調査中であり、例えば、「たつ」という動詞が空間的配置を表すとき、スル形式もシテイル形式も現れるが、テキストタイプの違いによる使用傾向は、「そびえる」とよく似ている。ただし、主観的な用法はあまり多くないようである。今後、さらに調査範囲を広げ、テキストとの総合作用の中で実現する空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能の全体像をより一般的なかたちでまとめていくことが課題である。

用例の典拠

朝日新聞データベース 現代日本語書き言葉均衡コーパス 青空文庫

参考文献

- 影山太郎(2012)『属性叙述の文法的意味』『属性叙述の世界』くろしお出版
- 金田一春彦(1950)『国語動詞の分類』『言語研究』15
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 須田義治(2009)『現代日本語における状態・特性・関係を表す動詞の連体形』『国語と国文学』86-11
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版